南山古梁文・谷文晁画『宮城野聚勝園記』をめぐる一考察
――文人美術の展開に果たした役割――

鶴岡明美（昭和女子大学）

『宮城野聚勝園記』（以下『聚勝園記』と略、九州大学附属図書館他）は、仙台藩の儒者櫻田澹斎（1795－1864）が歌枕の地宮城野に聚勝園なる居宅を設けたことを機に制作された刊本である。『国書総目録』に収録されるものの、これまで考察されることなく現在に至っている。本作品は正面摺による全15丁の折帖で、題字、文政8年（1825）の年紀を有する「宮城野聚勝園記」「園観七詠」および跋文は仙台瑞鳳寺の住職南山古梁（1756－1839）により、題字の後に江戸後期の画家谷文晁（1763－1840）の描く園とその周辺の図（以下「聚勝園図」と称す）を収める。巻末には澹斎の跋文（文政9年）を付す。こうした構成は、本作品が江戸時代初期まで遡る中国明代蘇州の園林画受容の系譜に属することを示している。

近年東京・足立区立郷土博物館による文化財調査において、この「聚勝園図」の制作に関わる新資料が出現した。足立郡上沼田村在住の文晁の弟子、舩津文渕の子孫に伝わる文晁一門関連資料の調査の際、櫻田澹斎による作画依頼に係る一連の文書が発見されたのである。本発表は「聚勝園図」制作の経緯を上記新資料の分析を通じて明らかにするとともに、文晁による園林画作例の系譜における位置づけ、さらには文人美術の展開に果たした役割についても考察を試みる。

澹斎による依頼文書と「聚勝園図」との比較から、周到に準備された依頼の具体相が浮かび上がる。文政8年冬の年紀を有する跋文草稿の添付により出版の意図が明確に示され、出版の詳細が見取り図によって示される。最も興味深いのは仙台の画家、「東澤」こと中川一清（？～1835）による聚勝園の図が文書に含まれ、「聚勝園図」の画面構成がこれに倣うことから、江戸に居ながらにして「聚勝園図」を描いた可能性がきわめて高い点である。このような形での依頼の背景には、澹斎の跋文にある通り諸氏の園への寄詠を促すという『聚勝園記』の刊行目的が存すると考えられる。すなわち画家としての名声に加え「木村兼葭堂居宅図」（寛政9年（1797））を一例として居宅や庭園の描写に定評のあった文晁画の持つイメージを喚起する力が、文人たちの寄詠を促すために切に必要とされたのである。こうした文晁画への期待は、彼が白河藩家老吉村宣猷の別荘を描いた文化3年（1806）刊の『南湖勝覧』もまた同様の目的で刊行されたことによって裏付けられる。

また「聚勝園図」は文政年間の作とされる「隅田川両岸図」（群馬県立近代美術館）にも通じる、大和絵と漢画を折衷した穏やかな描写を特色とする。一方鈴木省三編『宮城野の枝折』（大正3年刊）によれば、聚勝園には漢詩や漢文のみならず、幕府若年寄堀田正敦（1755-1832）の和文や公家、大名、国学者などの文化人による和歌が寄せられた。和漢に通じる筆致で歌枕の地宮城野に営まれた文人居宅を描く「聚勝園図」は、こうした和の伝統との融和を後押しする役割を果たした点において評価し得るであろう。